

水産研究のフロントから

第9回国際比較免疫学会学術集会

9th International Congress of the International Society
of Developmental and Comparative Immunology



Banquet へ出発前のスナップ写真：左から、中村 修さん（北里大学）、末武弘章さん（東京大学）、Val Smith 博士（Univ. St. Andrews, 集会長）、中尾。Smith 博士が3人を称して曰く「My Highland Samurai」だそうである。（撮影：東大・鈴木 謙先生）

第9回国際比較免疫学会学術集会が、6月30日～7月4日の間、英国スコットランドの古都セントアンドリュースで開催された。無脊椎動物からヒトまで、幅広い範囲の動物の免疫を探り、免疫機構の進化、多様性、そしてエッセンスをあぶり出そうというのがこの学会の主要な目的の一つである。今回は約500名という過去最多の参加者を数え、比較免疫学分野の発展を象徴していた。この学会が Elsevier を通して刊行するジャーナル *Developmental and Comparative Immunology* のインパクトファクターが、3点に迫る勢いで急上昇したこともうなずける。口頭発表、ポスター発表ともに、非常に充実した研究が多かった。学術集会を通して、スコットランドに典型的な不安定な天気（曇時々晴、突然雨）、ワイン、そしてビールを満喫したが、学術集会そのものの中で特に印象に残った点をいくつか紹介させていただきたい。

まずはなんと言っても Polly Matzinger（米国 NIH）である。学術集会3日目、そろそろ飲み疲れて中だるみの頃を狙って主催者が用意した、とっておきの招待講演者であるが、予想をこえる、ユニークで迫力ある講演

であった。「免疫応答を究極的に支配するのは、免疫細胞による自己/非自己の認識ではなく、組織から発せられる危険信号である」という彼女の Danger 説を、講演として聴いたのは今回が初めてだった。その説の正当性には様々な意見があろうが、自説を効果的に披露するトークショーは十分に堪能できた。きらびやかなパワーポイントによるスライドでなく OHP にその場で手書き、というスタイルも（毎度のことだそうだが）私には新鮮だった。その他の招待講演者も第一線の人々ばかりで、非常に勉強になった。唯一解せないのは、これら世界的に知られた Brightest Scientists が一人として自分の持ち時間を守れなかったことだ。朝一番から20分も40分も超過しては、その後3～4会場で平行して進んだ一般講演の時間が厳しくならざるを得ない。座長の方々はとても苦勞されたと思う。

第2はやはり Banquet であろう。参加者全員を1時間半もかけてバスでスターリング城に運び、城のお庭でまずシャンパン、次にホールに着席してフルコース、最後に中庭でビールやウイスキーを片手に歓談（バグパイプ楽団の演奏付き）、という豪華さであった。フォーマルな服装を求められたが、50人程がレンタルのキルト（スコットランドの民族衣装。写真参照）を纏った。私自身は「モンゴル相撲レスラー」みたいではないかと不安であったが、着てみれば下半身の“不安定感”にもすぐに慣れて快適であった。Banquet は夜中の12時まで続き、再びバスで宿舎に戻ったころにはへとへとになった。この学会には体力が必要である。

最後に、日本からの参加者数は米、英に続く第3位を占める30名余りで、そのうち18名が水産学会関係者であったことも記しておきたい。さらに日本人研究者の発表の中身も、それぞれのセッションをリードするものばかりであった。比較免疫学において日本発の研究がますます重要な地位を占めつつあることに、このうえない喜びを感じた。唯一残念であったのは、学会の Business Meeting に日本人がわずかししか参加していなかった点である。研究面での台頭に比例した、学会の運営などに対する貢献を、日本人に期待する声を何度か耳にした。ややこしい政治に首をつっこむことに抵抗感はあるが、学会運営や DCI 誌の編集に日本やその他アジア諸国の意見をさらに反映させるためには、この学会の役員により多くの日本人が参画することが重要であろう。

次の学術集会は、2006年に米国、サウスカロライナ州チャールストンで開催予定である。それまでに、20分の講演時間では到底収まらないくらいのデータをためることにしよう。

（九州大学大学院農学研究院 中尾実樹）